

6 0 1 1 - 1 6 9 0  
平成 2 5 年 1 月 2 5 日

各関係機関の長  
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 2 4 年度病害虫発生予報第 1 0 号について  
平成 2 4 年度病害虫発生予報第 1 0 号を発表したので送付します。

**平成 2 4 年度病害虫発生予報第 1 0 号**  
向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。  
**発生予報の概要**

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
施設野菜全般	1 病害全般	-	2
	2 アブラムシ類	やや多	2
冬春きゅうり	1 べと病	並	2
	2 うどんこ病	やや少	2
	3 灰色かび病	並	3
	4 褐斑病	やや少	3
	5 つる枯病	並	3
	6 黄化えそ病	前年、前々年と 同程度	3
	7 ミナミキイロアザミウマ	やや少	4
	8 病害虫全般(改植時の留意点)	-	4
冬春ピーマン	1 斑点病	やや多	4
	2 うどんこ病	やや少	5
	3 黒枯病	前年より少ない	5
	4 アザミウマ類	やや多	5
	5 タバココナジラミ類	前年と同程度	5
冬春トマト	1 葉かび病	並	6
	2 灰色かび病	やや多	6
	3 うどんこ病	やや多	6
	4 タバココナジラミ類	やや少	6
	5 トマト黄化葉巻病(TYL CV)	前年より少ない	7
冬春いちご	1 うどんこ病	並	7
	2 炭疽病	並	7
	3 ハダニ類	やや多	7
	4 オンシツコナジラミ		7

**作物の生育状況(1月中旬)**

冬春きゅうり、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春いちごは収穫期であった。

**向こう1か月の気象予報**

天気は平年と同様に晴れの日が多く、気温、日照時間はいずれも平年並の確率40%、降水量は平年より多い確率40%と予想されている。

(1か月予報 鹿児島地方気象台1/18日発表)

## 発生予報の根拠および防除対策

### 施設野菜全般

#### 1 病害全般

- (1) 気温の変化等には細心の注意を払い、適宜換気をする等施設内の温湿度管理を徹底する。
- (2) 多発してからは防除効果が劣るので、初期防除を徹底する。特にコスト低減のため、多重・多層被覆にしているところでは換気が悪く、病害の発生が助長される傾向があるので注意する。
- (3) 草勢の低下は各種病害の発生を招くので、草勢の維持管理に努める。
  - きゅうり：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病、褐斑病など
  - ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病、軟腐病など
  - トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

#### 2 アブラムシ類

平成24年度病害虫防除情報第6号(7月5日発表)、第13号及び14号(1月25日発表)参照

[ 予報の根拠 ]

- (1) 1月中旬における冬春きゅうりでの発生面積率5.0%( 平年0.5% )、葉当たり虫数0.5頭( 平年0.01頭 )はいずれも平年より多である。
- (2) 冬春ピーマンでの発生面積率23.1%( 平年0.7% )、50芯当たり虫数13.8頭( 平年0.01頭 )はいずれも平年より多である。
- (3) 冬春いちごでの発生面積率30.8%( 平年24.3% )は平年並、寄生株率6.8%( 平年3.2% )は平年より多である。

[ 防除上の注意 ]

- (1) きゅうりやピーマン等多くの作物にウイルス病を媒介し、多発すると新葉の展開が不十分になり、奇形葉やスス病を併発して草勢や果実品質を著しく損ねるので、発生初期に防除する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (3) 本虫のネオニコチノイド系薬剤に対する感受性低下が一部の地域で確認されているので、使用薬剤については防除情報第14号並びに地区の普及指導員や技術員の情報を参考にする。

### 冬春きゅうり

#### 1 ベと病 ( 並 )

[ 予報の根拠 ]

- (1) 1月中旬の巡回調査における発生面積率55.0%( 平年65.1% )は平年並、発病葉率4.7%( 平年11.2% )は平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

- (1) 湿度が高いときに発生しやすく、多発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- (2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。

#### 2 うどんこ病 ( やや少 )

[ 予報の根拠 ]

- (1) 1月中旬の発生面積率10.0%( 平年43.5% )、発病葉率0.4%( 平年3.7% )はい

ずれも平年より少である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおく。
- ( 2 ) 薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- ( 3 ) 厳寒期には暖房機の稼働時間が長く、暖房施設の周囲は乾燥しやすいので、適正な水管理に努める。

### 3 灰色かび病 (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の巡回調査では発生未確認であり、発生面積率0.0% (平年4.4%)、発病葉率0.0% (平年0.1%)はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 低温多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- ( 2 ) 花卉等の発病に注意し、予防を徹底する。なお、薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

### 4 褐斑病 (やや少)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の発生面積率20.0% (平年36.7%)は平年よりやや少、発病葉率0.2% (平年3.9%)は平年より少である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- ( 2 ) ベと病の後に激発することがあるので、ベと病の発生が多いほ場では特に注意し予防を徹底する。
- ( 3 ) 窒素質肥料の多用は発病を助長するが、逆に少ないと草勢の低下を招くので、適正な肥培管理に努める。
- ( 4 ) 摘除した発病葉は、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

### 5 つる枯病 (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の巡回調査では発生未確認であり、発生面積率0.0% (平年2.5%)、発病葉率0.0% (平年0.2%)はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 多湿条件下や窒素過多、着果負担等により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- ( 2 ) 発病前からの薬剤散布による予防に重点をおく。カルシウム欠乏等によるカップリング症状(落下傘葉)や摘葉、つる下ろし作業などで傷がつくと、そこから発病しやすくなるので早めに防除する。

### 6 黄化えそ病 (MYSV) (前年、前々年と同程度)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月の巡回調査における発生面積率10.0% (前年15.0%、前々年10.0%)、発病株率0.00% (前年0.05%、前々年0.00%)はいずれも前年、前々年と同程度である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬されるため、発生後は急激には場内に蔓延する恐れがある。ミナミキイロアザミウマの防除対策については、次項を参照のこと。
- ( 2 ) 感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し、埋却処分するか完全に枯れるまで密封処理する。
- ( 3 ) 本病と疑われる症状が発生した場合は、西臼杵支庁・農林振興局 (農業改良普及センター) または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡する。

(4) 改植時には、後述「8 病虫害全般(改植時の留意点)」を参照のこと。

## 7 ミナミキイロアザミウマ (やや少)

[ 予報の根拠 ]

(1) 1月中旬の発生面積率35.0%( 平年41.1%)は平年並、100葉当たり虫数1.7頭( 平年15.1頭)は平年より少である。

[ 防除上の注意 ]

(1) 本虫は、黄化えそ病を媒介するので早期発見と防除の徹底に努める。

(2) 最近、本虫の各種薬剤に対する感受性低下が確認されているため、同一系統薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除する。

(3) 施設内では卵・幼虫・蛹・成虫が混在しており、卵と蛹には防除効果が低いので、最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときはさらに連続した防除を徹底する。

(4) 有色粘着板による成虫の捕殺や、土中・地表面での蛹化を防止するためのマルチ被覆など、総合的な防除対策を講じる。

(5) 施設内及びほ場周囲の除草を徹底し、本虫の生息・増殖を抑制する。

(6) 整枝後の残さはハウス外に持ち出し埋却する。やむを得ず埋却できない場合は、残さをビニールで完全に覆い本虫の拡散を防止する。いずれの場合も処分場所の周囲に粘着板を設置する。

## 8 病虫害全般(改植時の留意点)

平成24年度病虫害防除情報第12号(1月18日発表)参照

[ 防除上の注意 ]

(1) ウイルス病を媒介するタバココナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、以下のことに留意し、次作の発生源を絶つように努める。

前作きゅうりの栽培を終了する前に、殺虫剤を7日間隔で3回散布する。

栽培を終えたら、ハウス内の除草を徹底するとともにきゅうりを完全に抜根する。

抜根後20日間以上蒸し込む。

蒸し込み期間中は、有色粘着板を設置し成虫を捕殺する。

後作きゅうりの定植時には、必ず粒剤を施用する。

(2) 前作に褐斑病などの発生があった場合には特に注意し、定植後直ちに予防防除し感染を防ぐ。

(3) 苗の購入の際は、病虫害の発生状況を十分確認する。特にミナミキイロアザミウマが寄生していたり被害痕が多い苗の定植は避けるとともに、ウイルス病の発生が疑われるときは直ちに株を破棄する。

また、農薬の散布履歴を確認し、育苗期に粒剤の使用がない場合は直ちに施用する。

## 冬春ピーマン

### 1 斑点病 (やや多)

[ 予報の根拠 ]

(1) 1月中旬の巡回調査における発生面積率23.1%( 平年24.2%)は平年並、発病葉率5.5%( 平年2.1%)は平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

(1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。

(2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、予防散布を行う。

## 2 うどんこ病 (やや少)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 1月中旬の発生面積率30.8% ( 平年57.6% ) は平年より少、発病葉率5.6% ( 平年7.9% ) は平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、早期発見に努め発病を確認したら早めに防除する。

( 2 ) 厳寒期には暖房機の稼働時間が長く、暖房施設の周囲は乾燥しやすいので、適正な水管理に努める。

( 3 ) 上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、2回以上の防除を実施する。

( 4 ) 微生物農薬は予防的効果が主であり、定期的に化学農薬も併用する。

## 3 黒枯病 (前年より少ない)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 1月中旬の巡回調査では発生未確認であり、発生面積率0.0% ( 前年：7.1%、前々年：0.0% )、発病葉率0.0% ( 前年：0.1%、前々年：0.0% ) はいずれも前年より少ない。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) ほ場内が多湿条件にならないよう換気に努め、排水を良好にする。

( 2 ) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処理する。

## 4 アザミウマ類 (やや多)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 1月中旬のミナミキイロアザミウマの花での発生面積率23.1% ( 平年50.4% )、10花当たり寄生虫数0.6頭 ( 平年1.7頭 ) はいずれも平年より少、50芯当たり虫数4.4頭 ( 平年1.7頭 ) は平年より多である。

( 2 ) ヒラズハナアザミウマの発生面積率53.9% ( 平年24.7% )、10花当たり寄生虫数7.1頭 ( 平年3.5頭 ) はいずれも平年より多である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) ミナミキイロアザミウマの成虫が10花当たり1頭程度寄生すると、販売等級格下げとなる果実が5%発生するので、発見したら早めに防除する。

( 2 ) ミナミキイロアザミウマに対し天敵による防除を実施している施設において、ヒラズハナアザミウマの発生が多い傾向にあり、生息密度が高まると被害が発生するので注意が必要である。

( 3 ) 施設内では卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときは更に連続した防除を徹底する。

( 4 ) 両アザミウマの薬剤感受性は異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。

( 5 ) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

( 6 ) 被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出し、有色粘着板による成虫の捕殺や、土中・地表面での蛹化を防止するためのマルチ被覆など、総合的な防除対策を講じる。

## 5 タバココナジラミ類 (ハ'イタイフ' B (シムハ'ー-リフコナジ'ラミ)、ハ'イタイフ' Q) (前年と同程度)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 1月中旬の発生面積率7.7% ( 前年7.1%、前々年0.0% ) は前年と同程度、100葉当たり虫数0.1頭 ( 前年0.4頭、前々年0.0頭 ) は前年より少なく前々年より多い。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- ( 2 ) 効果のある殺虫剤が少ないことから発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- ( 3 ) 施設内外の雑草はタバココナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- ( 4 ) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一系統薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬やコナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。

## 冬春トマト

### 1 葉かび病 (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の巡回調査における発生面積率10.0% ( 平年4.9% )、発病葉率0.2% ( 平年0.4% ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- ( 2 ) 発病初期の防除を徹底する。

### 2 灰色かび病 (やや多)

平成24年度病害虫防除情報第11号 ( 12月26日発表 ) 参照

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の茎葉での発生面積率20.0% ( 平年17.6% )、発病株率0.3% ( 平年0.9% ) はいずれも平年並である。
- ( 2 ) 果実での発生面積率20.0% ( 平年3.8% ) は平年より多、発病果率0.3% ( 平年0.1% ) は平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 低温多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等結露防止に努める。
- ( 2 ) 花卉等の発病に注意し、予防を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

### 3 うどんこ病 (やや多)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の発生面積率10.0% ( 平年2.3% ) は平年より多、発病葉率0.20% ( 平年0.19% ) は平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 乾燥した条件で発生しやすいので、過乾燥に注意する。
- ( 2 ) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、発病を確認したら早めに防除する。
- ( 3 ) 上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、1週間間隔で2回以上の防除を実施する。
- ( 4 ) 微生物農薬は予防的効果が主であり、また、ダクト散布では散布ムラが生じやすいので、定期的に化学農薬も併用する。

### 4 タバココナジラミ類 (ハ`イタイブ`B(シルハ`-リ`フコジ`ラミ)、ハ`イタイブ`Q) (やや少)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の発生面積率20.0% ( 平年30.9% )、100葉当たり虫数0.2頭 ( 平年2.4頭 ) はいずれも平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) ピーマンのタバココナジラミ類 ( 5ページ ) を参照のこと。

## 5 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) (前年より少ない)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の巡回調査では発生を認めておらず、発生面積率0.0% (前年8.3%、前々年0.0%)、発病株率0.0% (前年0.1%、前々年0.0%) はいずれも前年より少ない。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 本病の媒介虫であるタバココナジラミ類の防除を徹底する。  
( 2 ) 発病株は伝染源になるので根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在し、発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

### 冬春いちご

## 1 うどんこ病 (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬巡回調査における葉での発生面積率15.4% ( 平年38.0% ) は平年よりやや少、発病葉率1.5% ( 平年2.6% ) は平年並である。  
( 2 ) 果実では発生未確認であり、発生面積率0.0% ( 平年4.6% )、発病果率0.0% ( 平年0.2% ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 初め葉裏に発生しやすいので、早期発見に努め初期防除を徹底する。  
( 2 ) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。  
( 3 ) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに取り除きほ場内に放置しない。  
( 4 ) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

## 2 炭疽病 (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の発生面積率7.7% ( 平年6.3% )、発病株率0.1% ( 平年0.3% ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 多湿にならないように、ほ場の排水対策を十分行う。  
( 2 ) 発病した株は早期に除去し、新たな感染を防止する。  
( 3 ) 次作の親株には、炭疽病及び萎黄病の未発生ほ場からの苗を用意する。

## 4 ハダニ類 (やや多)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の発生面積率76.9% ( 平年59.5% )、寄生株率19.9% ( 平年13.5% ) はいずれも平年よりやや多、葉当たり虫数6.3頭 ( 平年1.2% ) は平年より多である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。  
( 2 ) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高まる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。  
( 3 ) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。  
( 4 ) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

## 5 オンシツコナジラミ

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 地域により薬剤感受性が低いオンシツコナジラミが確認されているので、地区の普及指導員や技術員の情報を参考にして防除に努める。

(2) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

#### その他

1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認してください。

宮崎県農薬安全使用啓発ホームページ

<http://nouyaku-tekisei.pref.miyazaki.lg.jp/nouyaku/user/top/miyazaki>

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センターホームページ

<http://www.acis.famic.go.jp/>

2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。

3 発生量(程度)の区分

多い	(高い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	(やや高い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	(やや低い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	(低い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 (平年値は過去10年間の平均)

4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- (1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- (2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- (3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- (4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

#### お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。  
ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

#### 【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670

FAX:0985-73-2127

E-mail: [byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp](mailto:byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp)